

「日々の理科」(第 2542 号) 2021, -6, 29

「梅雨の晴れ間の巻雲」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

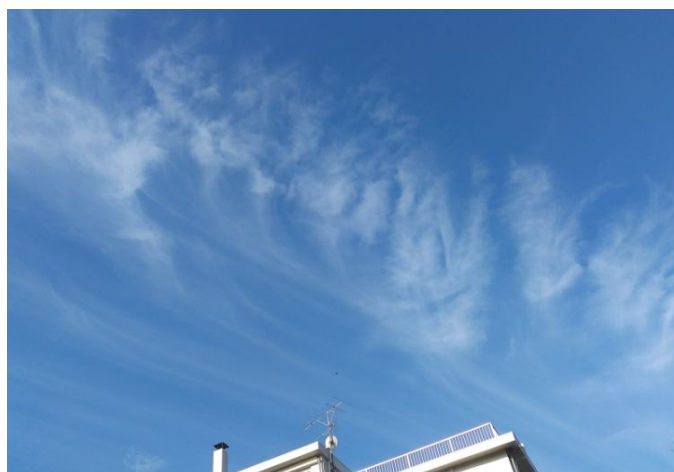
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

「梅雨の晴れ間」というのは、雨が降り続く日々の中で、よく晴れた日のことをいう。しかし梅雨時に丸一日完全に快晴ということは稀で、良くもって半日ぐらいの晴れ間もことが多い。



この日も朝から晴れていた。しかし、薄い雲が空の一角に見えていた。これは巻雲(けんうん)である。巻雲はかつては「絹雲」という字を充てていた。私はそのほうが特徴をよく表現していると思うのだが、現在は「巻雲」の字を使う。



巻雲は、雲の分類上は「上層雲」に属し、その中でも最も高い、高度 10,000 付近に現れる。当然この高度では氷点下 50℃程度の極低温なので、雲を形成する実体はすべて「氷粒」である。また一口に巻雲といってもさまざまなバリエーションがあり、この朝も「肋骨状巻雲」「放射状巻雲」「背状巻雲」など、数種類の巻雲が顔を見せていた。



しかしこの朝、最も美しかったのは「鉤状巻雲」(かぎじょうけんうん)である。これは氷晶の雲の一部が、上層の強風で引き伸ばされたものである。上層の風が強い時に現れ、天気は悪化することが多い。



小学校校舎の上空にも、次々と鉤状巻雲が現れて、密度を増していった。登校してきた子どもたちにも気づいた者がいて、「先生、今日はきれいな雲が見えたよ」と話していた。



その後、巻雲は密度を増して、毛状巻雲や尾曳巻雲に変化し、更に巻層雲、高層雲と徐々により低層の雲に覆われていった。予想通り天気は徐々に悪化して、翌日には再び雨になった。